



写真4 溝1（東から）

樹の東側は、樹の東端から4.5 mまでが木桶で、そこから先が豊島石製のU字溝となる。溝の南側にも、木桶の痕跡を示す砂層が拡がっていたことから、溝1以前の古い時期の木桶があったことが分かる。これはT-2調査区を見れば顕著に理解される。木桶の木組みは、出土した鉄釘から第30図のように復元される。

溝1の東側部分で、東西約3 m、南北45 mの範囲にわたって石組造構が認められた。火災前の御殿のこの場所には、南北方向の石垣があった。石組 第30図 溝1木桶復元図 造構は丁度この石垣の位置と一致することから暗渠排水溝（溝1）を保護するための施設と考えられる。

調査区の北側で、東西約4 m、南北約8 mの範囲にわたって石敷造構が確認された。拳大から人頭大の大きさの円礫を散詰めたものである。東辺と南辺には、幅約50 cm、深さ約40 cmの溝（溝6）が走る。溝の壁面も円礫で覆っているのが特徴である。溝の中からは等間隔で鉄釘が出土した。このことから、木桶による暗渠排水であったことが分かる。石敷の中には礎石を想定させるものはなかった。石敷の範囲は、火災前の御殿の台所門の位置に相当するが、門と石敷の因果関係は不明である。

溝1と石敷造構との間に土壌1が位置する。調査範囲内で長辺12 m、短辺85 cm、深さ30 cmを測る隅丸方形の土壌である。壁面・底面ともタタキ仕上げである。調査区北端では土壌2の南半分が検出された。検出範囲では長辺1.7 m、短辺45 cm、深さ50 cmを測る。土壌1同様内面はタタキ仕上げである。



写真5 溝1（西から）



写真6 石組造構（東から）



写真7 石敷造構（東から）



写真8 石敷造構南側溝断面 (西から)

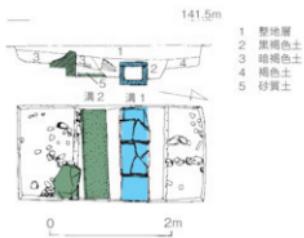
平面形も隅丸方形になるものと考えられる。

やはり調査区北端に沿って東西方向に走る溝4が、土壙2から南北方向に走る溝5がそれぞれ検出された。両者とも石組の開渠である。溝5は2m程で石組がなくなる。溝4と溝5は、直角に接続する部分で土壙2に切られているが、本来は連続していたものと考えられる。この溝は、台所門と本丸御殿とを画する溝に相当するものと考えられる。

T-2 (第31図、写真11・12)

T-1溝1の東側延長部の遺存状況を確認するために設定した。T-1溝1の東端は豊島石製のU字溝であつたが、本トレチではそのまま東へ延びていることが判明した。蓋も一部破損していたものよく残っていた。T-1溝1の南側に砂層の分布が認められたが、

T-2では溝1の南側に平行して明確に幅40cmにわたる砂層の堆積が認められた。この砂層の範囲が木桶による暗渠排水の痕跡である。木桶を裏付ける鉄釘も出土している。木桶の腐食に伴う豊島石製U字溝への付け替えと考えられる。



第31図 T-2平面・断面図 ($S = 1 : 80$)



写真9 石敷造構南側溝鉄釘出土状況 (東から)



写真10 土壙1 (東から)



写真11 全景 (東から)



写真12 溝1蓋除去後（西から）



写真13 T-3全景（南西から）

T-3・4

本丸入口の南北両石垣の根石を確認するために設定した。いずれも現在の最下段の石が根石に相当することが確認された。出土遺物はなかった。

出土遺物

調査地点が城内台所の近くであるためか、小規模な廐棄土壙がいくつか存在した。それらに廐棄されている遺物はいずれも概ね幕末期のものである。

出土遺物の大半は碗の破片である。これらのうち、トレンチ1埋土から出土した碗の見込みに「大」の文字を記したもののが数点見受けられた。単純に「大」のみを毛筆で記したものから、松平家の「剣大」を象ったものまでバリエーションがある。



写真14 T-4全景（北西から）



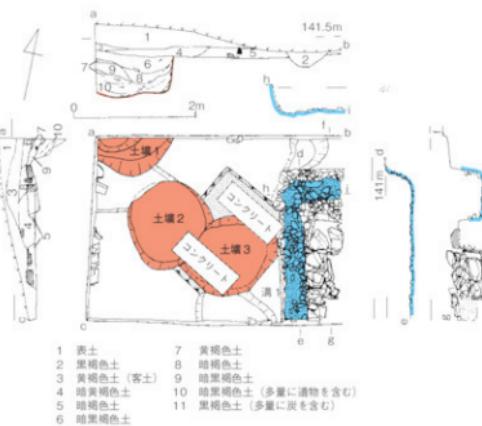
写真15 出土遺物

3. 第2次調査（平成10年度）

T-1 (第32図、写真16・17)

第1次調査T-1溝6を追求するためて設定した。1-T-1溝6はそのまま西へ約1m延び、さらに南方向に直角に折れ1-T-1溝1に合流することが判明した（溝1）。1-T-1溝1の西壁も確認することができた。西壁はタタキ仕上げでなく石組が施されていた。

調査区の中央部には、説明版を支えるコンクリートの基礎が2箇所あり、全域は調査できなかつたが、土壤3基が検出された。土壤の平面形は不正円形で、径は12~15m、深さは



第32図 T-1平面・断面図 (S=1:80)

約60cm前後を測る。いずれの土壤からも大量の遺物が出土した。ゴミ穴と考えられる。



写真16 全景 (南から)



写真17 溝1 (北から)

T-2 (第33図、写真18・19)

1-T-1溝2を追求するために設定した。南西方向への延長は確認されたが、完全に閉塞されていることが確認された。調査区南半は無電中化、トイレ水洗化に伴う配管溝により搅乱を受けている。



写真18 全景 (北から)



第33図 T-2平面・断面図 (S=1:80)

T-3 (第34～38図、写真20～35)

備中槽の規模・構造を把握するために設定した。調査の過程で、現在の備中槽石垣の内側に一回り規模の小さい石垣が存在することが判明した（第34・35図）。この石垣は、現在の備中槽南面石垣から内側へ約6m入ったところで東西約14m、西辺約9m、東辺約7mを測る。

西辺は約70°の角度で北西方向へ延びている。T-4及び第3次調査T-1の調査結果により、約18m行った所で北に直角に折れることが判明している。東辺は約60°の角度で北東へ延びているが、どこまで続くのかは不明である。高さについても、南西隅で約3mまで掘下げて確認したが、それ以下については危険が伴うことから断念した。

埋没石垣の石積の特徴としては、板状の石を立てて使用し、その間を小礫で充填するという工法が上げられる。現在見られる石垣は横口積（布積）が一般的であるが、埋没石垣では石の一番大きな面を石



写真20 全景 (空中撮影)



写真 21 埋没石垣南西角 (南西から)

写真 22 埋没石垣南東角 (南東から)



第34図 T-3 平面図 ($S = 1:100$)



第35図 埋没石垣立面図 ($S = 1:80$)



写真23 埋没石垣西側屈曲部（南西から）



写真24 石垣裏込めに用いられた五輪塔水輪

垣面に据えるように積まれており、非常に不安定な積み方となっている。埋没石垣と現在の石垣との間は、全て栗石で充填されていた。栗石の中には五輪塔の単体が数点認められた。

備中槽がかるの槽台石垣は、南面で東西約25m、西面は南面とほぼ直角で約15mを測る。東面は南面に対して約80°の角度で13m北に延び、北東方向に走る埋没石垣に接する。南東出隅から長局南面石垣までは6.5mを割る。備中槽本体に限つて言えば、ここから北側は石垣でなくとも問題はないようと思われるが、埋没石垣まで延びている。

絵図によると、備中槽は東西約24.5m、南北約8mで、北西部に5m×5mの台形状の張り出し部が取り付く平面形となっている。発掘調査の結果、西、南、東の槽の基礎は直接石垣に上にのっていることが確認された。北側は槽の平面形に沿って1ないし2段の石列を据えていることが判明した。特に、「鶴山城址」があった箇所は、往時のまま保存されており、表面を平滑に仕上げた状況が如実に観察される（写真26）。

また、南石垣天端面の中央から西寄りの約15mの区間にには、1辺約30cm角程度の扁平な板石を北側に面を揃えて並べている状



写真25 北側基礎石列（北西から）



写真26 北側基礎石列（西から）



写真27 南天端面細部（北から）



写真28 南天端面の状況（西から）

況が確認された。これらの石の中には、豊島石製U字溝の破片を転用したものも含まれていた。備中槽内部には、礎石あるいは礎石抜取りを想定させる箇所が幾つ認められたが、柱との位置関係が適合しないことなどから礎石建ちの建物ではなかった可能性が考えられる。備中槽外部北側にも礎石と思われるものが散見されるが、これらは文化6年（1809）の本丸御殿火災後の改築で、備中槽と御殿が直接連なった時のものと考えられる。

また、絵図（第36図）には、北西の張り出し部に「便所」が描かれている。発掘調査では、絵図どおりに便所遺構を検出した（第37図）。南側の「小」用（便所2）は、平瓦を4～5枚立てて円形状に囲い、その中を拳大の円窓で充填していた。恐らく、地下へ自然浸透させる構造になっていたものと考えられる。「小」用のすぐ北側に、東西80cm、南北140cmの長方形の範囲にタタキ面が認められたが、この範囲が「大」用（便所1）に相当するものと考えられる。このタタキ面には、板材と角材を据えていた痕跡が認められた。便所東側の基礎石列には、幅10cm、長さ1.5mにわたって漆喰が遺存していた。

備中槽北側の基礎石列に平行して、幅80cmの東西溝が検出された（溝1）。溝の東端は、石垣取り付いている。埋土からは鉄釘が出土していることから、木樋による暗渠であったことが分かる。溝の両壁に沿って小窪が連なっていることからも木樋の存在を証明するものであろう。また、埋土には多くの炭化物が包含されていた。

埋没石垣西辺に沿って南北に走る溝がある（溝 第37図 便所1・2 平面・断面図 ($S = 1:40$) 2）。この溝は現状では溝1に接続して解消しているが、本来はさらに備中槽の下にまで延びていたものと考えられる。溝1の北約2mの位置に平行して溝3が、さらに溝3と直交して溝4が検出された。これらの溝からも鉄釘が出土したことから、木樋による排水溝だったと思われる。

別の絵図によると、便所2の南側に手水処が描かれているものがある。溝5はこの手水処から北東方に延びる溝で、陶器製の土管を連続したものである。手水処と土管とは直接接続していないが、位置



第36図 御城御座敷御絵図面（「津山城資料編」より）

